



令和4年度研究助成 【音楽振興部門】より

旧制高等女学校在学生、卒業生の音楽活動に関する実態解明 —シリアスレジャーの視点から—

聖路加国際大学大学院看護学研究科
准教授

歌川 光一

1. 研究の背景①—歴史研究として

旧制高等女学校は「良妻賢母主義」をその教育目標に掲げていたが、歴史研究としては、「良妻賢母主義による抑圧」という視点に留まらない、教育史と文化史を横断するような研究（「女学生」研究、「少女」研究等）が蓄積されつつある。

筆者は、社会教育学・生涯学習論の視点から、明治後期～昭和戦前期の同階層の女子の音楽のたしなみに着目し、大学院修士課程在籍時より、その教習実態や表象の解明を試みてきた。その成果の一つとして拙稿（2019）がある。同時期のジェンダー規範と、ピアノ、箏、三味線（長唄）をたしなむことのイメージの関係の変遷について触れ、また、「趣味」の意味の変容（TasteからHobbyへ）と「花嫁修業」という規範の成立の関係について示唆した。近代日本音楽史としては、「家庭音楽」の流行の内実に触れた研究として位置づけられる（細川2020：143-172）。

一方、研究の過程で、進学や就職ではなく「家居」を選択した高等女学校卒業生の日常生活を追うことの難しさを痛感してきた。合わせて、現在でこそ教育機会は「学校/社会/家庭」と分けられ、学校外の私教育としての「稽古事」

「習い事」、自分磨きとしての「教養」「趣味」、といった諸概念が確立しているが、明治後期～昭和戦前期は、ちょうどこれらの区分や概念が生成する時期にあたる。これらの理由から、高等女学校在学生、卒業生の音楽活動（特に、邦楽の教習）を史実として切り取ることは容易ではない。

一例だが、表1は、東京都内の学校等で実施された稽古事調査の結果を整理したものである。当時としては結婚間近だった高等女学校卒業生については、実用的な稽古事が上位を占め、音楽の稽古事の回答者は多くない。しかし、小学生・高等女学校生については、1910年代から20年代には、箏と長唄がピアノよりも上位を占め、1930年代に入っても、⑧のように、ピアノよりも長唄を習っている女子が多い学校が存在していることがわかる。

本研究は、拙稿（2019）では部分的にしか触れることのなかった、高等女学校の在学生、卒業生の音楽活動の実態をより明確にしていくことを企図している。

2. 研究の背景②—現代的関心

一方で、旧制高等女学校の在学生、卒業生の音楽活動に着目することは、単に歴史の空白を埋める、ということの意味しないと考える。

表 1 東京府内就学者層女子の主要な稽古事とその割合

①	属性	学校	調査年(調査数)	主要な稽古事とその割合(%)								
				長唄	常磐津	箏	清元	書道	茶の湯	謡曲	絵画	
①	小学校女児	日本橋区内小学校	1909年(不明)	102※	19※	13※	11※	9※				
②		四谷区内小学校	1913年(2501)	4.8	4.4	2.1	1.2	0.4				
③		女子学習院	1920年(283)	20.1	14.5	12.7	9.5	4.2				
④		東京市内小学校	1940年(432)	14.6	4.4	2.8	1.4	1.2				
⑤	高等女学校生	府立第一	1913年(634)	47.9	29.8	17.1	15.4	1.7				
⑥		女子学習院	1920年(284)	30.2	26.8	20.8	17.3	10.6				
⑦		府立第一	1928年(1155)	27.3	23.6	12.7	6.4	4.7				
⑧		府立第一	1931年(1148)	8.5	7.0	6.4	5.2	4.5				
⑨		東洋英和	1934年(447)	38.7	16.1	11.8	10.6	9.6				
⑩		府立第三	1917年(738)	44.5	27.9	27.5	21.6	5.1				
⑪	高等女学校卒業生	府立第一	1921年(470)	20.4	14.9	13.8	9.1	6.4				
⑫		府立第五	1935年(1251)	54.1	44.5	22.2	16.3	12.6				

出典) 拙著 (2019: 47) 表 1-2 を転載。紙幅の都合上、①～⑫の一次資料の詳細については拙著を参されたい。

その理由の第一に、昨今教育業界を騒がせている「部活動の地域移行」の問題がある(松井 2022ほか)。もともと、教員の長時間勤務や体育系部活動における体罰問題に端を発した部活動問題は、文化系部活動の議論にも飛び火し、今日の「部活動の地域移行」という論点に至っている。「部活動の地域移行」は、学校教育と文化発信の関係をどのように捉えるかという問題に関わっているが、実はこれは、女学校研究としては新しい論点ではない。中学校に比べ正課としての音楽が盛んだ(土田 2015)だけでなく、時にはプロや東京音楽学校の学生を招聘して盛大な音楽会等を開催していた高等女学校は、「地域文化の場」としての機能を果たしていたと言われてきた(山本 1992)。

理由の第二に、部活動にせよ、習い事にせよ、音楽活動に真剣に励むことがその後のキャリアに影響を与える、という事例としても旧制高等女学校生の生き方は大いに参考になる。日本では社会心理学的なレジャー・スタディーズがそ

こまで発展してこなかったが、真剣に取り組まれる趣味は国際的には「シリアスレジャー」(カナダの余暇社会学者R.A.ステビンズが提唱した概念)と呼ばれ、近年、杉山昂平氏(東京大学)などによって日本でも広く紹介されつつある(宮入・杉山 2021 ほか)。シリアスレジャーとしての音楽活動を可能にした環境として、(彼女たちの家庭の文化資本に加え、)高等女学校を捉え直すこともできる。音楽史研究では、洋楽受容とその担い手としてのプロに着目した研究が盛んだが、高等女学校在学生、卒業生はその予備軍として重要な研究対象だと考えられる。

3. 研究の展望

旧制高等女学校の学校資料は、多くの場合、学校の資料室、図書室、校長室等に所蔵されている。筆者は、旧制中等諸学校の校友会雑誌・同窓会雑誌の研究(斉藤 2015)にも携わってきたが、本助成によって、東京府内の高等女学

校を中心に、その所蔵状況がより明確になってきている。2022年8月には、同窓会（篁会）のご協力のもと、旧制東京府立第二高等女学校（現・東京都立竹早高等学校）の史料調査をさせていただいた。例えば、同校卒業生の山川菊栄は以下のように回想している。

近頃日本的教養といふことがしきりにいはれるやうになった。昨年、三十年前に出たきりの女学校をたづねた時、その女学校での調査表によると、百人中九十人までは課外にさういふ稽古事を習つてをり、中でも踊り、三味線、ピアノが最も多かつたし、殊に『好きなもの』のなかに『芝居』をあげてゐる者の多いのが目についた。私などの在学中、日露戦争前後には、琴を習つてゐる者が一級中三分の一、他に二三人が図画や習字の稽古に通つてゐた位で、課外に物を学ぶのはまづ無かつたし、殊に芝居の話などは出たことがなかつた。これは山の手サラリーマンの家庭から来てゐる娘ばかりで、その頃のさういふ家庭では、殆ど何処も一様に謂ゆる質実剛健の勤労一点ばりといつてよく、同じ東京でも、江戸の名残を留めた下町とは全く違ふ対照をなしてゐた。下町が江戸の町人文化を代表してゐたとすれば、山の手はお上りさんの田舎の氣質を代表してゐたといつてよかつた。〔中略…引用者〕さういふ点で明治時代の貴

族的な特殊のものが、大正から昭和にかけて著しく大衆化したとも思はれ、また大衆の生活程度がそれだけ向上したとも考へられる。尤もさうした方面に限らず、いかに多くの所ゆる日本的なことについて、私などは何も知らずに来たことだらう。西洋的なものについてそれ以上知らないのはいふまでもない（山川1940：74-80）。

山川の回想は、大正～昭和期を経て、サラリーマン層の女子の稽古事の対象が「山の手／下町」の地域性を超えて多様化していたことを示しているが、（ジェンダー規範の問題から）遠出せずに日常を過ごすことが期待された同階層の女子の音楽活動を捉えていく際に、地理的な要因への配慮も欠かせないと感じさせる。

なお、1930年代には結婚難の時代となり、大日本連合婦人会による社会教育事業として高等女学校卒業生向けの御茶の水家庭寮が設置された。これと前後するように、高等女学校同窓会も卒業生向けの講習会や随意科目（今日でいう稽古教室）の整備等の動向が見られる。このように、（1. に述べたこととも関わるが、）都市部の高等女学校卒業生の音楽活動を追うことで、学校教育史、社会教育史、大衆文化史のつながりが見えてくる。研究分野間の隙間を縫ってくれる女学校、女学生の存在に感謝しながら、引き続き、成果の取りまとめに励んでいきたい。

謝辞

本研究に対して研究助成を賜りました一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 細川周平（2020）『近代日本の音楽百年（第2巻）デモクラシイの音色－黒船から終戦まで』岩波書店。
- 松井瞳（2022）「吹奏楽部の地域移行における可能性と課題－吹奏楽教育の維持のために－」『音楽文化の創造（CMC）電子版』Vol.22。
- 宮入恭平・杉山昂平（2021）『「趣味に生きる」の文化論－シリアスレジャーから考える』ナカニシヤ出版。
- 齊藤利彦（2015）『学校文化の史的探究－中等諸学校の『校友会雑誌』を手がかりとして－』東京大学出版会。
- 土田陽子（2015）「中学校と高等女学校における音楽教育とジェンダー－音楽教育の位置づけと意義の変容過程」小山静子編『男女別学の時代－戦前期中等教育のジェンダー比較』柏書房、pp.165－208。
- 歌川光一（2019）『女子のたしなみと日本近代－音楽文化にみる「趣味」の受容』勁草書房。
- 山川菊栄（1940）『女は働いてゐる』育生社。
- 山本禮子（1992）「施設・設備からみた高等女学校教育の一側面」『和洋女子大学紀要 文系編』32、pp.59－82。